

「情報処理学会論文誌：数理モデル化と応用」の編集にあたって

城 和 貴[†] 北 栄 輔 (ゲスト・エディタ)^{††}

複雑系科学を提唱したサンタフェ研究所が1984年に設立されて以来、複雑系科学に関する研究は数学や物理学、化学、生物学などの分野から、コンピュータを用いた計算機科学、遺伝子情報、社会科学などへ拡張されています。特に、最近ではコンピュータハードウェアの長足の進歩に基づいて、ニューラルネットワーク、進化的計算、セル・オートマトンなどのシミュレーション技術に関する研究と、それら技術のバイオインフォマティクスや社会・経済などへの適用に進んできました。複雑系科学は理学、工学、経済学、社会学などの多様な分野の研究者によって研究され発展してきました。そのために、異なる分野の研究者が一堂に会して、その成果を披露し、議論を深める機会はありませんでした。「MPS シンポジウム2006——複雑系の科学とその応用」は、様々な分野の研究者が一堂に会して、複雑系科学について議論するために企画されました。

シンポジウムでは、国内から3件の招待講演をお願いしました。この中には、マルチエージェントと社会科学、DNA計算、行動ファイナンスについての講演が含まれています。一般セッションに対しては、理学、工学を中心に多様な分野から講演申込みがありました。一般講演の講演件数は31件で、これらは8のセッションに編成されました。これらの発表はいずれも非常に興味深く、かつ重要な研究ばかりで、多数の参加者を交えて活発な議論が繰り広げられました。

こうして開催されたシンポジウムで発表された研究に対して、論文の投稿をお願いしました。本特集号には、最初14件の投稿申込みがあり、その後関連分野における優れた研究者によって厳しい査読が行われました。この過程を経て一般論文として採択された7件と、事例紹介論文として採択された1件をまとめて、今回の特集が完成しました。採択率は57%となり、一

般の投稿論文と同等もしくは少し低い採択率となりました。この特集の発刊によってこの分野の研究がますます活発になり、それが社会における多くの問題解決に活用されることにつながれば幸いです。

最後になりましたが、本シンポジウムの開催にあたって大変お世話になった、21世紀COE「計算科学フロンティア」の皆様、情報処理学会数理モデル化と問題解決研究会の運営委員の皆様、情報処理学会「ナチュラル・コンピューティング」研究グループ(当時)の皆様、名古屋大学の構成員の皆様に厚くお礼を申し上げます。また、論文誌の発刊に際しては、論文誌編集委員会の編集長である城和貴先生はじめ編集委員の皆様やシンポジウムのプログラム委員の皆様にたいへんお世話になりました。ここに記して心より感謝の意を表します。

TOM19には、シンポジウム特集以外にも、オリジナル論文として2006年12月のMPS62(東京)から2本、2007年3月のMPS63(松島)から1本、2007年5月のMPS64(大阪)から3本の計6編を掲載しています。TOM19に関するMPS62, 63, 64の研究会連動投稿の採録論文数/投稿論文数は2/2, 1/1, 3/3で、採択率は67%となります。また、これに関する担当編集委員は、伊藤実、上田修功、北上始、品野勇治、城和貴、渡邊真也となっています。

配布部数は900部を予定しております。なお、論文誌の定期購読制度もありますので、ぜひ、こちらもご利用ください。また、研究会開催記録、研究会登録案内、投稿案内などに関する最新の情報はすべてWWWページ上に掲載しております。すべての情報は研究会ウェブページ(<http://www.ipsj.or.jp/sig/mps/>)よりたどることができますので、MPS研究会および論文誌TOMに関しては、そちらをご参照くださいますよう、お願い申し上げます。

[†] 情報処理学会論文誌「数理モデル化と応用」編集長/奈良女子大学理学部情報科学科

^{††} シンポジウム・プログラム委員長/名古屋大学大学院情報科学研究科